Sienna's Watching
シーナズ・ウォッチング
tele-work edition
テレワーク版

お酒 のキャップ・栓のロゴデザイン観察

Watching Closure Logo Design of Saké & Alcholic Beverages

●チャオ、チャーオ。きた産業はキャップ・メーカー。世界のパートナーから調達するものを含め、お酒のキャップ・栓では「世界屈指のポートフォリオ」を自負しています。●そんな職業柄、うちの社長さんは「飲んだお酒のキャップ・栓はすべて保管する、特徴あるキャップのお酒は飲んでみる」というルール（飲む口実?）を、長年守っているそう。●ためこんだ、お酒のキャップ・栓のコレクション（?）、大型の紙袋 4 つ分を借りてきて、デザインを分類、異なる酒類間の比較をしました。今回は COVID-19 の対応でテレワーク版。撮影も自宅なので、写真が少々ハレーションあり。ゴメンなさい。すべて飲んだ後=開けた後なので、王冠やミュズレのワイヤーはゆがんでいます。●なお、HISTORY は社長の文章。お酒のキャップ・栓の蘊蓄（?）もお楽しみください。 (text=Sienna K. Emiri + T. Kita)

清酒・焼酎の 30mmPP キャップ Saké & Shochu Φ30 RO Caps

DESIGN ●印刷デザインは 4 つに分類できます。**タイプ 1.「文字無し、デザインのみ」**＝上段左側、**タイプ 2.「アルファベットあり」**＝上段右側、**タイプ 3.「デザイン+ブランド名など」**＝中段、**タイプ 4.「ブランド名のみ」**＝下段。 ●お酒は圧倒的にタイプ 4 が多い。漢字 2 字、3 字、それ以上で並べています。 ●写真に載せていませんが、実はもう 1 つ、**タイプ 5.「印刷無しの無地」**（黒無地とか金無地とか）があって、今はこれがとても多いですね。

HISTORY ■ PP キャップが日本の通称だが、正式には「ROPP Cap」＝「Roll On Pilfer Proof Cap」。**1920 ～ 30 年代に英国とアメリカで**開発・実用化され、世界中に広まった。 ■ **Roll On（ロールオン）**は、ねじのないアルミ製キャップをびんにかぶせた後、ローラーでびん口のねじ山に沿ってアルミを変形させてねじを成型する技術。個別のびんに合わせた「オーダーメイドねじ」になるので、あらかじめねじを成型しておく「レディーメードねじ」より開封が安定する。 ■ **Pilfer Proof（ピルファープルーフ）**は泥棒除け、すなわち、改ざん防止。一度開けると、「ミシン目」が破断されて開けたことが分かる仕組み。 ■ ROPP キャップは、日本の酒類には 1960 ～ 70 年代から普及しはじめ、今や清酒・本格焼酎で最も使用されるキャップである。この写真の直径 30mm サイズが主流（高さはいくつかの種類がある）。 ■なお、**水平に切れる「パーフォレーション（ミシン目）**」のほかに、日本では**縦に割れる「スプリット」**がある（ガラスびんのリサイクル促進目的）が、**世界では少数派**。日本酒でも、海外向けにスプリットなしの PP キャップを採用している蔵元もある。

ワインのスクリューキャップ 30X60 と 30mmPP Wine Φ30XH60,H30 & H20 Screw Caps

DESIGN ●上段は、今や世界標準のワインキャップ「30 x 60」。初めの 2 つは日本ブランド。エンボス加工があるものが多い。下段は、「30mmPP キャップ」で、すべて日本ブランド。 ●デザインには決定的な違いがあります。**「30 x 60」には回す方向の「→」の表示が全くないのに、「30mmPP キャップ」にはすべて「→」の印刷がある。**それに、小さな字で「開栓に注意してください」などの印刷がありますね。「日本的」発想？

HISTORY ■「30 x 60」は直径と高さ（mm 単位）の事。1960 年代にフランスで特許化され、**「ステルキャップ」**という商品名で、世界中で使われた。日本でもライセンス生産され、主にウイスキーで使われた。が、スカート部分（アルミ）がびんに残ってガラスのリサイクルに不適という理由で、日本では 1990 年代には使用停止。**かつてサントリー・リザーブが 30x60、サントリー・オールドは 30x44 のステルキャップだった**が、どちらもプラスチックねじに変更された。 ■一方世界では、ワインの天然コルク栓の TCA（コルク臭）問題のクローズアップをきっかけに、1990 年代以降さまざまなコルク代替栓が提案された。その一つが 30 x 60 のスクリューキャップで、21 世紀になって、ニュージーランドやオーストラリアでワインに最適との研究報告が出てから、世界中の多くのワイナリーから支持されるようになった。今も増加傾向にある。ステルキャップと同一規格だが、キャップの天面角を押さえる「トップサイドシール」でキャッピングされ、**「ステルヴァン」**（商品名）が通称になっている。 ■前述のように、日本ではガラスリサイクル促進の観点で使用中止した経緯があるが、2005 年から**メルシャン**が輸入ワインでスクリューキャップを積極的に採用。国産ワインでも 2010 年頃から中堅が、2014 年からメルシャンが、2016 年からサントリーが、自社製品に採用している。 ■技術トピックスとしては、ライナーの酸素透過度のバリエーション、Tin や PVDC 不使用のライナー素材、ネジ山の見えないキャップなど。スカート部が容易に取り外せる**「Green Cap」**（グアラ社 - きた産業）も登場している。

シャンパンとスパークリングのミュズレ Champagne & Sparkling Muselet

DESIGN ●左から、シャンパーニュ（フランス）13 個、フランチャコルタ（イタリア）3 個と CAVA（スペイン）3 個、日本 3 個。他のキャップに比べて、ミュズレの印刷は凝ったデザインやカラフルなものが多い。コレクターがいるのもうなずけますね。 ●下段左端の**ヴーヴクリコのミュズレは裏にも印刷**がある（その右、矢印）のをご存知ですか？ 虫眼鏡で見ないと読めないような小さな文字で、クリコ・ポンサルダンのサイン。凝ってます。 ●シャンパーニュのびん口はほぼすべて 29mm なのですが、上段左端の**ドンペリは 27mm** です。

HISTORY ■ミュズレは**フランス語の Muselet**、英語で Wire Hood。ガス圧でコルク栓が飛ばないよう押さえる金具。スパークリングワインのほか、ビール（一部のベルギービールなど）でも使われる。古くは、コルク栓は、麻紐で止めていた。パスツールが低温殺菌を実験したのは 1862 年だが、そのイラストでもコルク栓を紐でくくってある。 ■今の、コルクとワイヤーの間に小さなプリキ板（Plaque）を置く形式は、1844 年にフランスで **Adolphe Jacquesson** が取得した特許に由来する。最初はワイヤーとプラークは別パーツだった。ワイヤーの足も 3 本だった。「捩った 4 本足のワイヤー」と「印刷されたプラーク」が一体となった、今の形式になったのは戦後。その結果、高速のワイヤリングマシンも登場した。

ビール・シードルの王冠 Beer & Cider Crown Caps

※ デザインの比較分類のために選択したブランドです。当社製や当社が販売したもの以外に、他社製のキャップ、王冠、栓が含まれます。また、海外ブランドは、海外の製造者によるキャップ、王冠、栓です。

ウイスキー・蒸留酒のキャップや栓 Whisky & Sprit, Caps & T-tops

DESIGN ●左の 6 つは「日本のブランド」、右の 6 つは「海外のブランド」。 ●**左端の 2 つは、サントリーとニッカですが、どういう経緯があったのか、とてもよく似ていますね。** ●なお、「イチローズモルト」、「ラフロイグ」、「ティオペペ（ソンブレロのデザイン）」は T トップコルク栓です。

HISTORY ■昔はウイスキーもワインのようなコルク栓で、スクリューで開けていた。「T トップ栓」（コルクに木製の持ち手を付けた栓）を開発し、初めて採用したのはスコッチの**ティーチャーズ**で 1913 年。「スクリューキャップ」を初めて採用したのはスコッチの**ホワイトホース**（右から 6 番目）で 1926 年。どちらも、新しい栓のおかげで売上を飛躍的に伸ばしたそう。ROPP キャップを初めて採用したのは米国の**シーグラム**で 1933 年。 ■写真の中で日本にない技術を 2 つ紹介。**ジョニーウォーカー**（右から 5 番目）の ROPP は胴体部分が少し膨らんでいる（**「バルジキャップ」**）。びん口のネジは普通 1 条だが、**カンパリ**（右から 3 番目）の ROPP は **2 条ネジ**で、少ない回転角で開けられる。 ■ウイスキーやスピリッツでは、世界的には、不正な継ぎ足しやフェイクが横行している。これを防止するため、海外の蒸留酒ブランドでは、内部にボールが入った **Non-Refill キャップ**を採用する銘柄も多い（上の写真では右から 2 つめのスミノフー海外モデルのキャップーが該当）。一方、日本ではそのような問題はないので、サントリー・オールド、スーパー・ニッカ、サントリー ROKU などは、シンプルなプラスチックのねじキャップを使っている。

DESIGN ●左の 8 つが日本のクラフトビール、特に左上の通称**「麦マーク」（当社の汎用デザイン品）が、日本のクラフトビールのスタンダード。** ●中央の 4 つはアメリカ、アイルランド、デンマーク、オランダ。 ●右の 6 つはビールの宝庫、ベルギーのものです。

HISTORY ■アメリカ人 **William Painter** が発明し、1890 年に出願した特許が王冠の始まり。そのころ普及しだした、ソーダ飲料とともに世界中に広がった。初期のころにヒダの数が 24 から 21 になり、1980 ～ 90 年代にライナーがコルクから樹脂に変わったが、基本形状は **130 年変わらない**。王様が頭にかぶる王冠に似ていることから、王冠＝Crown と呼ばれるようになった。 ■元々ライナーがコルクだったのでクラウンコルク。日本のキャップのトップメーカー、日本クロージャー社の社名も、2013 年まで**日本クラウンコルク**社だった。Painter の会社も **Crown Cork & Seal** 社と言ったが、この会社は Crown Holdings として存続している。（製罐の世界最大手の 1 社。いまは、王冠製造はほとんど行っていない。） ■日本初の王冠利用は、ビールでは 1900 年の**東京麦酒**（のちに大日本麦酒に吸収合併）、清酒では 1900 年の**江井ヶ嶋酒造**、次いで 1901 年の**白鶴**。英国人による日本初の王冠工場が横浜で稼働したのは 1909 年なので、輸入された王冠を使っていたことになる。 ■アメリカでは、栓抜きなしでも手で回せば開けられる「ツイストオフ・クラウン」を使うビールも多い（日本でも**軽井沢ビール**が使用）。また、酸素吸収ライナー（Oxygen Scavenging）も、クラフトビールでよく利用される。

ワインのコルク栓 Wine cork, Natural & Nomacorc

ワインのキャップシュール Wine Capsules

DESIGN ●上左の 6 つが「フランス」、上右の 3 つが「日本」。下左の 3 つが「イタリア」、下右の 6 つが「アメリカ」です。 ●なんとなく、デザインにお国柄が出ますね。

シャンパン・スパークリングのコルク Champagne & Sparkling Cork

DESIGN ●上段が天面、下段が接液面の写真です。シャンパーニュのコルクにはほぼ例外なく、天面と接液面の両方に焼き印があります。 ●余談ながら、シャンパンコルクは、開栓後も長い間マッシュルーム型を保つものと、半年くらいで形が崩れてくるものの両方があります。コルクの質なのでしょうか。

※ デザインの比較分類のために選択したブランドです。当社製や当社が販売したもの以外に、他社製のキャップ、王冠、栓が含まれます。また、海外ブランドは、海外の製造者によるキャップ、王冠、栓です。

DESIGN ●上段左は「**5 大シャトー**」、**ラトゥール、ラフィット・ロスシルド、ムートン・ロスシルド、マルゴー、オー・ブリオン**。なんだか貫禄あり。 ●コルクデザインは、「文字表記中心」＝上段右、「デザイン中心」＝中段左、「縦デザイン」＝中段右、と 3 つに分類できるようです。縦デザインのコルクには、自動的に上下を判別して打栓するコルカーもあるそうです。 ●下段の左 9 個は「長さのバリエーション」。下段最後の 2 個は、赤印刷の事例。コルクは伝統的には焼印でしたが、最近は印刷も多いので、赤もできます。写真には日本ブランドが 8 個ありますが、どれだかわかりますか？

HISTORY ■コルクは**「ポアッソン比」**（横方向に圧縮したとき、縦方向に発生する伸び）がほぼゼロである唯一の物質である。栓としてはギリシャ・ローマ時代から使用されていた。中世のガラスびんの普及とともに栓として登場、とする文献もある。 ■日本で初めてコルク栓を使ったのは 1867 年に発売された目薬**「精錡水」**（日本初の液体目薬、それまで目薬は塗り薬）。当時びんの栓は木栓だったがよく漏れた。そこで舶来びん製品に使われていた使用済みコルクを、適当な大きさに削って精錡水に使ったところ、全く漏れなくなったそうだ。日本のびん業界では、いまだに「木口」「王冠口」「キカイ口」といった呼び名があるが、木口がコルク栓用にあたる。 ■**マツダ**（自動車）、**吉野工業所**（プラスチックボトル）、**フジシール**（シュリンクラベル）といった有力企業の祖業はコルク。プラスチックが一般化する前、コルクは重要な工業製品だった。 ■天然コルク栓世界最大手は、ポルトガルの**アモリム**社。ことし 2020 年が創業 150 年。写真には**ノマコルク**も 4 個含まれる。（どれだかわかりますか？） ノマコルクは合成コルク最大手。きた産業は、アモリムとノマコルク、両方の製品を日本で販売しています。

清酒・焼酎の KT（冠頭） Saké & Shochu KT (Kanto) capsules

清酒・焼酎の KS（替栓） Saké & Shochu KS (Kaesen) T-top plungers

DESIGN ● **KT** も **KS** も「文字（銘柄など）」もの と、「デザイン」ものに 2 分類できます。 ● KT の側面には取り口があって、開封時にアルミのエッジで怪我をしないように、との注意書きがあります。日本語のほか、「Atten. Cut Edge」など、英語を併記したものも増えてきました。 ● KS の右下 2 つは、**MZK** というキャップで、直径が大きいので開けやすい。

HISTORY ■王冠を「単式王冠」、冠頭・替栓を**「複式王冠」**と呼ぶ。**「デラックス王冠」**とも呼ばれる。「栓抜きがないと開けられない」、「再栓（リシール）できない」、という単式王冠の 2 大欠点を補うため、日本独自に開発されたもの。かつて、飲料・調味料産業のなかで「清酒」が代表格で、その大部分が「一升壜」だった。故に、複式王冠は、主に清酒一升壜のために開発された。 ■日本では、大正時代にブリキ板（王冠の原材料）の国産化が始まり、大正末〜昭和初期に日本人による王冠業が始まった。特許の切れた単式王冠の生産から始まったが、多くの王冠業者が競って様々な複式王冠を考案し、また特許を出願した。 ■今の形状の冠頭・替栓を最初に採用したのは**キンシ正宗**で、1960 年の**三越**の手印商品ー今で言う PB ーの「天女」。替栓は、長らくコルク栓に木製トップ（「木笠」という）を取り付けたものだったが、1970 年ごろ、**月桂冠**が今のような樹脂栓を採用した。（キンシ正宗も月桂冠も、**きた産業**の製品。） ■戦前・戦後から 1980 年代までは一升壜が清酒・焼酎の主要な容器であったが、その後、紙パックと小びんが主流になり、清酒の総量も減って、冠頭・替栓は激減した。しかし、2010 年以降、720ml びんに冠頭・替栓を使う動きが広まって、ふたたび注目されるようになった。アルミ製である冠頭の欠点を克服したプラスチック製 **AZK** なども開発されている。

カップ酒のキャップ Wide Mouth Cap for Saké Cup

DESIGN ●カップ酒とそのキャップは日本独特のもの。「ブランド中心」のものと、「社名・住所、アルコール度数や原材料、開け方の注意事項など、ラベルに書くことをすべて印刷してある」ものに分類できます。 ●ここでは、円周にスコアがあるタイプ（上段、当社呼称「WM」）と、側面に切り込みのあるタイプ（下段、当社呼称「WQ」）に区分して撮影しました。

きた産業のホームページには、こんな情報もあります。

■ 1930-80 年のお酒王冠の「銅版バーチャル博物館」
www.kitasangyo.com/museo/museo.html

■「エポックメーキングな王冠・キャップのパテント 20 選」

■「ワイン栓の選択肢」ed.9.1

お酒のキャップは、きた産業
Closures for Sake, Shochu, Wine, Beer, Spirits, Sparklings & all alcoholic beverage